

創刊100周年

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

2001

10



第一巻第一号(明治34年創刊号)表紙

第100巻 第10号 日本幼稚園協会



保育実技シリーズ⑨

最新刊!

折り紙を使って保育室を明るく楽しい雰囲気 30分でできる 折り紙ランド

忙しい保育者をサポートするシリーズの1巻です。



①折り紙で壁面装飾と 天井飾り

折り紙を使って、季節にふさわしいテーマにそった画面を構成してみました。この一冊で、あなたも今日から保育室に彩りを与える演出家になれます。本書を活用して、子どもたちも保育者も、ウキウキワクワクするような、素敵な保育室に変身させてみましょう。

②子どもにも折れるやさしい 折り紙も入っています

③作って遊べる折り紙も用意しました

折った作品を膨らませたり、飛ばしたり、音を出したり、着たりかぶったりして楽しく遊べる作品も多数紹介しています。



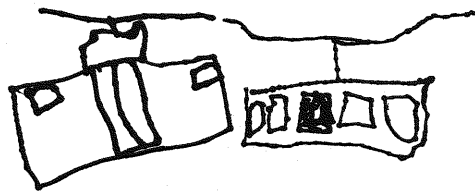
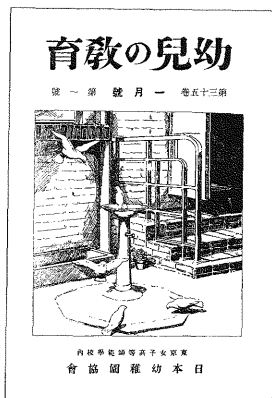
川並知子／著（聖徳大学短期大学部教授、聖徳幼稚園園長）

AB判 96頁 定価：本体2,200円＋税

キダーブックの
フレール館

幼児の教育

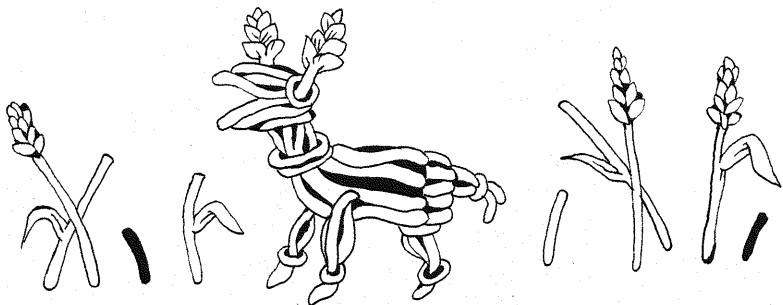
第100卷 第10号



幼 児 の 教 育 目 次
 — 第一〇〇卷 第十号 —

© 2001
 日本幼稚園協会

ドイツの自然と生活	小林 美実	(4)
お兄さんになったね	岩間 里香	(12)
保育参加ウィーク「三勝二敗」	入江 礼子	(19)
ある日		(26)
私が幼児教育を志した頃(22)	津守 真	(28)



いま、子どもたちは

大人たちが誇りをもって大人本意に堂々と生きればいい！……………今井 嘉江… (38)

『幼児の教育』と私 思い出すままに……………井上 直子… (43)

耳をすまして 目をこらして(18)……………宮里 暁美… (48)

幼稚園誕生の時代—関信三の葛藤—

(十)『幼稚園創立法』—関信三の幼稚園……………国吉 栄… (50)

比企の畑から 畑の経済学……………小宮山洋夫… (60)

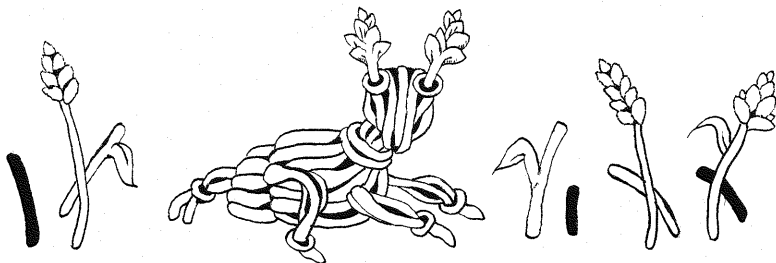
表紙絵／片柳 淳子

扉題字／津守 真

扉カット／第三十五卷第一号表紙・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「静かな十月」

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・榎田 正子

編集部／仲 明子



ドイツの自然と生活

小林 美実



一九九九年三月に私立短大を定年退職した私は、すぐドイツへ飛んだ。これから三ヶ月滞在するハンブルクは、三十五年前に私学研修生として約半年生活したなつかしい所である。出発の日、私は体の中心から頭の天辺へ、スカッとさわやかな「気」が吹きぬけていく感じがした。解放され自由になるとは、こんなに良い気分なのか。今回全く自由な身で、ドイツの家庭生

活を楽しみながら、見たり聞いたりしたいことがある。ドイツは、世界で最も環境問題へのとりくみが進んでいる。私達が知っているのは、ゴミ、フロンガス、原子力エネルギー、最近ではバイオトープなど。人々がこれらの問題を含め、自分達の生活環境をどの様に考え行動しているのだろうか。その中で子ども達が育てられている、と思うと、期待感でいっぱいになっ

た。自由に遊ぶ時間も少なく、常に家や学校や施設に、安全と言う理由にしろ閉じ込められがちな日本の子どもと、どう違うのだろう。ドイツも日本同様、出生率は世界最低のレベルにある。子どもに対する親の態度、厳しいと言われる躾はどうなっているだろう。不安も大きかった。

滞在先の友人の家に着いたのは、夕方、しかしまだ明るかった。さつそくケーキとコーヒー、テーブルの上に灯されたロースクの柔い光で迎えられた。「もしよかつたら、少し散歩をしよう」と誘われ、家の横の草地を横切り、川ぞいの林の中の散歩道を歩く。次第に夕闇がせまる川を、時々手漕ぎボートやカヌーが過ぎていく。この川は、市中心の大きな湖、アルスター湖にそそぐ川を、人工的に広くした運河だが、岸辺は草や木で、すっかり自然の姿に戻っている。モーターボート類は禁止。住宅地の川では、当然の事と言う。

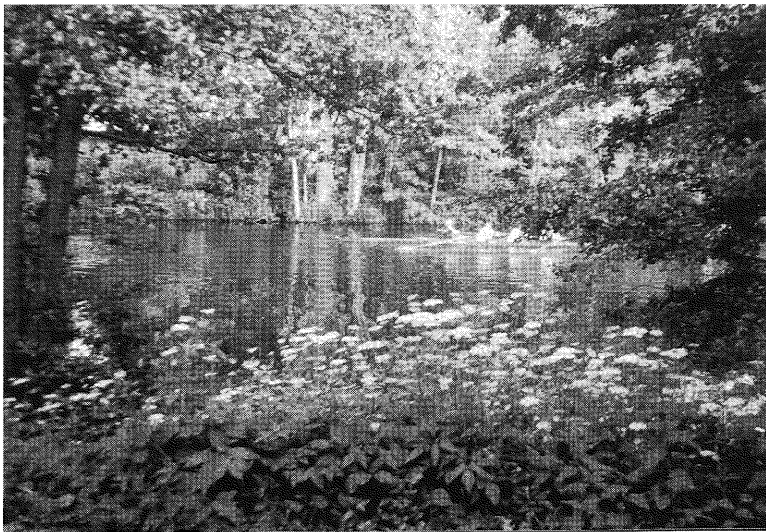
私の生活は、早朝五時に散歩するのが日課となつ

た。三時頃から美しい声で小鳥達が歌い出す。生ゴミが無いためか、鳥はほとんど見かけない。朝霧の中から、釣人や、カヌー、ボートを漕ぐ人、ゆつくりジョギングをする人、散歩する人の姿が現れる。日本でよくみかける、健康のために前方をみつめて懸命に速足で歩く人はいない。皆、まわりの景色、空気、音、時には雨も楽しんで、ゆつたりとしている。夕方にはぎやかだ。子ども連れやよく訓練された犬を連れた人が増え、子ども達が草地を駆けまわる。りすが木の上を走り、茂みからは兎も出てくる。

この辺りは、*Klein garden*のエリアがいくつもある。日本では「市民農園」と訳されるが、庭の持てない市民に市が貸し出す土地で、今は農園ではなく、花や木いっぱい庭、日本で流行の、ガーデンングの場である。日本とは全く違い、一ヶ所に小さい所で二十位、大きいエリアでは、庭が延々と続き、一つのコミュニティ、つまり人々のふれあいの場になっていること

だ。そのための集会所のある所もあつた。Kleinとは「小さい」の意だが、広い所は約三〇〇平方メートルもあつて驚いた。皆、思い思いに庭をデザインし、小さい木の小屋を自力で建てたり、スモークの小さい設備を作ったりしている。休日や仕事を終えた夕方や夜、ここに家族や友人で集り、コーヒータイムをすごしたり、食事をしたりしている。庭の間の道を歩くと、手をふったり、声をかけられたりした。日本からの花だ、と得意そうに見せてくれたりする。「庭の手入れが大変でしょう」ときくと、「こんなに楽しいことが、何故苦勞なのか」と妙な顔をされてしまった。

私の友人の家は三階建の少し高級長屋風で、各家に地下室と庭がついている。彼等は常に自分の家の庭に気を配り、美しさを保つ努力を惜しまない。天気の良い休日には、リラの花の下で、朝から食事をとった。娘達が通学の為の自転車を手入れるのも、この気持ち良い庭であった。今ドイツは、昔と違って、食材が実



▲川の岸を散歩して見る風景

に豊富で、流通機構の改善で、野菜、果物も日本より格段に安い。しかし彼等は、食事より緑の豊かさ、自然の豊さを何倍も大事にしている。心も体も健康になるには、食欲より自然だと言う。さすがワンダーホーゲル発祥の国である。野菜も果物も不揃いだ。

五月中旬頃には、木や草の花が一斉に咲いた。ハイネの詩の「美しい五月」である。市の中心部を除いて、道路には立派な街路樹があり、ビルの間の木も含めて、その太く大きいこと。特にマロニエ（栃の木）には巨木が多く、ローソク型の花が見事だ。東京の霞が関にも同じ木があるが、どうしてどれも背を低く、枝も切ってしまうのだろう。盆栽の伝統のせいだろうか。黄金色のくさり状の花を枝からいっばい下げて咲く木は私の気に入った木で、勝手に、ゴールドエン・チェーンと名付けていた。それに大好きな石楠花も、二階の屋根にとどく位立派になっていて、あざやかな花の色で壯観である。歩道には、きちつと自転車専用

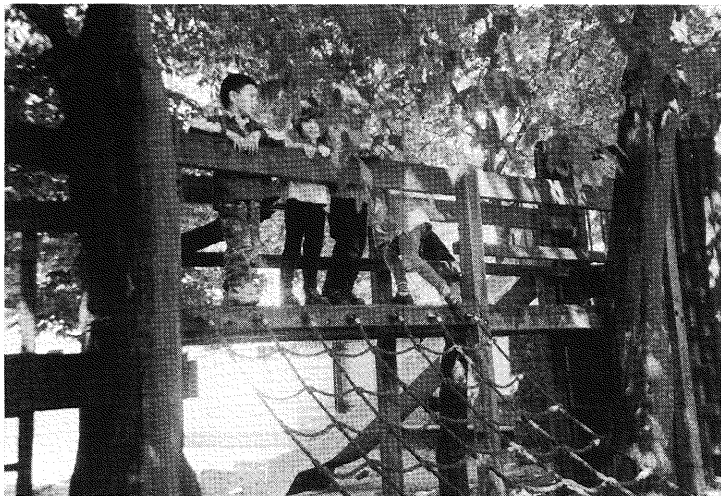
の部分が区別されているから、幼い子どもの手をひいて歩く親の表情もやさしい。草地の野の花や、家々の庭の花を見て、おしゃべりしながら歩いている。歩道は舗装の部分は少ない。土のまま両端は残している。雨がしみ混むだけでない。木の葉や花びらも、土の上に散ったものはきたなくない。駐車場も土のままが多い。車の上には、木の葉や花びら、小鳥の糞まで落ちていて、車が汚れることより、木のあること、鳥や虫が共に生きていることの方が、人間にとって大事だと言う。靴も車も、掃除をすればよい。人間の都合を優先すれば、自然は壊れるのだ。

滞在中、保育園三園を訪れた。どの園も庭は土のまま、大小の木が沢山ある。園長の一人が私に「木が沢山あることは、子ども達にとつて素晴らしいことです」と言った。木の間の木製の橋や塔や小屋は、遊びの拠点になっている。子ども達も左右に上下に走りまわっている。自然の枯木を無造作に組んだだけのシン

ブルな遊具、港町ハンブルクラしく、古い木船を置いて
いる園もあった。保育室の天井からさがる手造りの
モビールも、細い枯枝と木の実でできていた。近所の
森へ遊びに行ったクラスの子ども達が持ち帰ったもの
は、枯枝、落ち葉、小石、枯れ草など。これはどこで
見つけたか、何に見えるか、など、園長先生に見せな
がら嬉しそうに話している。持ち帰ったものを使っ
て、棚の上を飾ったり、器に入れて遊んだりする。日
本なら、ペットボトル、カン、発砲スチロール、空箱
だろう。保育室に置かれた観葉植物は、冬枯れの季節
に緑を楽しませてくれる。各室の先生達が、これらの
植木や草花を、子どもの前で実にやさしく大事に世話
している。しおれた花をちよつとつまんでから、花全
体をみて、鉢の置き方を変えるなど、多分彼等が家庭
で育つ時見ていた親のしぐさだろう。全員が同じ花を
観察しながら育てる様な活動は無いが、子どもをとり
まく環境そのものが、自然に対する気持ちや態度を育



▲保育園の庭の自然木を組んだシンプルな遊具



▲保育園にて 木立ちの間の橋で遊ぶ

てていると感じた。知識でなく、伝えられる文化としての環境教育か。

六月の休日に、市中央の大きな公園で、子どものための「音、音楽、あそび」のフェスティバルが催された。木々の下は、さまざまな色の花でいっぱい。隣のなだらかな芝生の丘は、手作り楽器のエリア。ポランティアの指導で作った民俗楽器風の音具を、丘の上で気持ちよさそうに盛んに腕を大きく動かして音を鳴らしている。若いデザイナーが作った不思議な音のする筒型の奇妙な音具は草の上に無造作においてあり、赤ん坊から大人まで自由に音を鳴らして遊んでいる。満開のバラ園には、生活用品や自動車の部品他、面白い音の出そうな物体がいくつもの枠につりさげられ、子ども達が嬉しそうに音を次から次と鳴らしている。中には興奮して、踊る様にたたいている子どももいる。私は子ども達がバラの間を走りまわったり、花にさわったりしないか、ヒヤヒヤした。全くそういう姿は

なかった。大きな池には水鳥や魚がいるが、ここでも池に小石をなげたり、鳥をおどしたり追いかけたりする子どもはいない。野外ステージでは、いろいろな国のダンスや演奏があつたが、目立つのは老人の姿。やはり子どもは体を動かして遊ぶ方がいいのだろう。芝生の長いスロープを使った遊びや、水鉄砲の遊びでは、都会の子どもなのに、野性味いっぱいのもやしさと元気さだ。服も顔も手足も、草だらけ、泥だらけ、水でびっしょり。

私は電車や列車に乗る時、幼児を連れた母親を見つけて座り、話しかけた。子ども達は、人形劇をとてよく見ている。保育園でも、月に一回位、そして親もよく連れていっしょに見ると言う。特に「カスパ―（伝統的な人形劇の主人公）」は人気の様で、親も子どもの時、それを見て育つた」と言う。乗物の中で見ていると、親は子どもに、社会でのルール（躰と言うより、人々を気持ちよく共生するためのルール）をき

ちつと教えていることがわかる。囲りの人々の態度も一つの良い手本になつて思う。電車など公共の乗りものの中で眠る人をあまり見かけない。座つても、まわりに気を配っている。若者や子どもは、必要と思うとサツと立つて席をゆずる。小さい子どもには、親が立つように促している。家でも保育園でも、食事は必ず食べられる分だけを、自分で自分の皿にとることを厳しく言われている。小学校の給食で、山のように毎日残飯が捨てられている日本を考えると、その差に愕然とする。

ドイツでは、子どもは親、まわりの大人を見て育っている。自然への接し方、生活の仕方、外の社会で守べきルールなどの、その基には、大人達が「どの様な生活、どの様な社会や世界を築き、いかに生きるか」を常に考えていることが感じられた。ドイツの自然は、厳密には「自然」ではない。人工である。しかしそれを自然の営みに戻し、保つための努力を惜しまな



▲バラ園で音具で遊ぶ

い。「自然と共に生きる」とは、日本人の本来の生き方ではなかったか。今もなお、物と食中心の華やかな流行的文化（はやりもの文化）の中で、「いやし・ゆとり」のことばが躍る日本の社会のむなしさを感じている。

（鶴見大学短期大学部）

☆前回の「ラオスという国で出会った子どもたち」（第一〇〇巻第二号）の四十四頁五行目の六十一台は一台の誤りでした。お詫びして訂正いたします。
（編集部）



お兄さんになつたね

岩間 里香

私は今年初めて担任を持ちました。保育経験は

一年と半分くらいです。年中組四歳児の花組を受

け持つことになり、期待と不安、そして気合

(?) はいっぱい。年度始めの年齢ごとの話し合

いでは、「年中組になったことだし、子どもたち

が、自分の力で身の回りのことやお友だちとのこ

と、遊びを楽しめるように援助をしていこう」と

大きな目標を持ちました。

四月、新学期が明けていよいよスタートです。

一人ひとりとあいさつを交わし、にこにこの顔が

揃いました。三月生まれのY君はとてものんびり

屋さんです。Y君の時間はとてもゆっくり動いて

いて、面白そうなものを見つけると、まっすぐそ

れに向かっていきます。そしてうれしい時は、大



きな声で笑い、両足でピョンピョン跳ね回りま
す。とつても素直な男の子です。そんなY君が、
四月の終わりくらいから、「幼稚園行きたくない」
というようになりました。

四月当初の様子

花組の子どもたちにこんなお話をする。

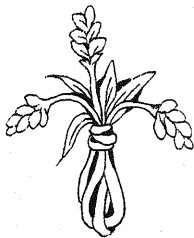
「みんな年中さんになったね。少しお兄さんやお
姉さんになったから、幼稚園に初めて来たお友だ
ちや、小さいお友だちに、やさしくしてあげよう
ね。もし困っていたら、助けてあげようね」。子
どもたちは「はあーい」と、とても元気に返事を
する。「お兄さん、お姉さん」になったことがう
れしそうだ。家庭でも「もう年中組になったんだ
よ、がんばってね。小さいお友だちの面倒を見て
あげてね」と話をした方が多かったようだ。

Y君は幼稚園のバスで通っている。バスから降

りると「おはよう！」と元気なあいさつ。「Y君
（自分をY君という）花組さんだよ」と、よく
言ってくる。「そうだね、花組さんになったから、
二階のお部屋なんだよね」と言葉を交わす。
私には「僕、年中さんになったんだよ」と、その
喜びを伝えているように、主張しているように思
えた。

年中組になるころには、ほとんどの子どもが身
の回りのことは、自分でできるようになってい
る。Y君は、お母さんの作ってくれるお弁当が大
好きだが、小さなソースのケースや、ピニールに
入った果物の入れ物を開けることがどうも面倒の
ようだ。「自分ででき

ない」とちよつと、
なげやりな様子。「一
緒に手伝うよ」とい
うが「先生がやって」





と、座ったまま。周りのお友だちは徐々に食べ終わり、片付けて遊びだした。たまたまY君も席を立て、遊びの輪に走っていく。「Y君、片付けてから遊ぼうね」というが、なかなかその気にはならない。「Y君、Y君」と呼ぶと、席に戻ってくるが、またすぐにお友だちのところへ……。お母さんと相談をして、大きなお弁当箱と小さな果物の箱の二つにしようが、片付けは苦手のようで（実は私もそうなので、その気持ちはよくわかる）片付けるよりも先に遊んでしまう。

Y君は着替えに關してもそうであった。「自分で着てみよう」というが、「着れない」といって、そこに座り込む。そして、楽しそうに遊んでいる友だちを見つけては、パンツのまままで、その中に入って一緒に遊んでいる。とても楽しそうである。私の気持ちとしては楽しく遊んで欲しいのだが、でもやっぱりけじめもつけないと、と

悩み「Y君着替えてから遊ぼうね」と声をかける。一緒にシャツだけ着たところで、またすーつと走っていく。「Y君、じゃあ後はがんばって自分で着ようか」と言い残し、見守る。二十分ほど経っても、まだシャツとパンツのままだ。もう五、六回は「Y君お着替えしようよ」と声をかけた。よっぽどその気にならない言葉がけなんだと反省する。いや、ここまでくると、落ち込んでしまう。こんな毎日が続く。

四月中旬の様子

Y君は、その気になれば、自分で着替えたり、お弁当の片付けはできる。とても時間がかかるけれど。その間、何回声をかけるだろうか？ 遊んでは戻って（私が呼ぶので）、また遊んで。「先生、Y君パンツのままだよ」と教えてくれる子どももいる。でもたまたまに、「あれっポロシャツは着



たな」と思えるときもある。

残念ながら、幼稚園には帰らなくてはならない時間がある。Y君の場合は、遊びたいという気持ち、それが先行してしまつて片付けや着替えが出来ない、それにちよつと苦手だし、面倒だという気持ちもあるのだろう（この面倒という気持ちも個人的にはよくわかる）。少しずつでもいい、やっぱり手伝いながらも自分でする気持ちになつてもらいたい。気長に「Y君、がんばつて片付けてみよう」「Y君もう帰る時間になつちやつたよ、早く着替えよう」と声をかける。だんだん余裕もなくなつてきて、帰る間際には「Y君、着替えないと帰れなくなつちやうよ」と、ちよつと強い口調になつてしまふ。「やゝゝだゝゝ」Y君は泣いてしまふ。「じゃあ一緒にスピードで着替えちやおう」結局、バンザイをして、上着もズボンも全部着せてしまふ。このような日々が続く。

四月下旬の様子

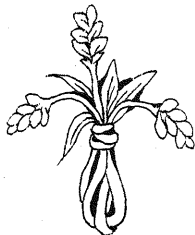
いつもY君と同じところでバスに乗っているK君が風邪で二日ほど休んだ。二人はバスの中でも仲良しだ。二十分ほどの距離を楽しく過ごして行く。「T君、今日お休み？」Y君は元気がない。

「うん、お風邪だつて」。次の日も「今日もお休み？」と聞く。しかし、Y君はしばらくすると、他のお友だちが遊んでいるところに入つていき、面白い動きなどをして、友だちを笑わせている。

Y君はひょうきんものなのだ。

Y君の生活は変わらない。「Y君、もう着替えないと」。そして、また泣いてしまふ。

ある朝、幼稚園にいたバスから泣き顔のY君が降りてくる。





「先生、バスに乗るときからママと一緒にいた
いって泣いていたんです」とバスの先生が心配し
ている。「Yくんママに会いたいの？ ちよつと
淋しくなっちゃった？」と寄り添う。「ママがい
い、ママがいい」と泣いている。直感「ちよつと
無理させすぎちゃったかなあ」。

その日の夜、お母さんに電話をする。「Yが幼
稚園に行きたくないっていうんです。ちよつと心
配で」とお母さん。やっぱりそうか。「年中組に
なっているら自分でがんばろうって、ちよつ
と無理させちゃったかもしれないです」と様子を
話す。お母さんは妹もいるので、そのことも心配
していた。もつとY君甘えさせてあげよう。焦ら
なくてもいいんだ、そう思う。

五月連休明けの様子

Y君は水痘にかかり、約十日ほど家庭で過ごし

た。そして、久し
ぶりの幼稚園、
やっぱり泣いてい
る。「Y君元気に
なったんだね、よ
かった。一緒にお

部屋行こう」というが「やあだあ」と激しい抵
抗。「さみしいなあ、Y君と花組で遊びたい」「や
あだあ、先生じゃあいやあーあ」「じゃあどう
しようか？」「ママにお迎えきてって電話して」
とY君。電話の受話器をとり、電話をしている振
りをする。「お迎えに来るって」というと、うな
ずく。でもまだ涙は止まらない。ママに会いたく
て、どんどん涙はこぼれてしまう。一日中「ママ
に会いたい」といつている。お母さんに協力して
もらい、しばらく降園時間にお迎えにきてもらう
ことになった。





五月中旬の様子

朝はまだ泣いてくることが多いが、面白そうなおところには、すぐに飛び込んでいく。みんなを笑わせることも楽しんでる。でも、たまにはちよつと静かになると、「ママに会いたい」と泣いてしまう。

ある朝「お母さんがね、Y君ががんばったらうれしくて泣いちゃうって」と言ってきた。泣いていない。むしろちよつとすつきりした様子で元気に保育室のほうへ走っていく。ちよつとがんばっているのかな。お母さんも心配なんだ、私もY君との今この時間を大切にしようと思つて思う。着替えや片付けも手伝つては見守り、また手伝つては……と前よりも一緒にするように心がけた。

ある日のこと、お弁当の前にまた「ママ……」と涙が。「Y君、もう少ししたらママお迎えに来

るよ、みんなで遊んでいたら楽しくなっちゃうよ」と声をかける。しばらくして、Y君がお弁当箱を手に持ち、私のところへやってきた。「先生にコリコリあげる」。コリコリはY君の大好き物の柴漬けのことだ。「これおいしいんだよ、Y君大好き」と周りの友だちによく教えてあげている。よかった、うれしかった。Y君の大好きなものをくれるなんて。「うわあ、うれしい。Y君くれるの？ ありがとう。じゃあいただきますをしたら、Y君のところに行くね、こぼさないように上手に机まで持つていってね」。私では嫌で、お母さんがよかったY君が、また少し近づいてくれた。(結局、コリコリはあつという間にY君の胃におさまり、私の口に入ることはなかった)。

五月下旬の様子

Y君は幼稚園が大好きになったようだ。にこに



こ顔で登園する。帰るときもバスに乗って帰る。たまにお迎えにきてくれる時は、うれしいのか

「今日お迎えです」とはっきりした口調で言ってくる。「はい、わかりました」というと、安心してように保育室のほうへ走っていく。私の知らぬ間に職員室にまで行って「今日お迎えです」と言っているらしい。すつかり頼もしくなった。

ある日のこと、いつものように帰る前に着替えをしていると、「先生、Y君ね、一人で着替えちゃった。お兄さんだからね」と着替えの終わったY君が立っている。ズボンの吊りはくるくるとよじれて、そのまま引き上げたズボンにポロシャツは収まることなく、もたーつとズボンの外にこぼれている。「Y君、すごい自分で全部着ちゃったね。がんばって着たね」。Y君はとても満足そうだ。

Y君は今も、面白いことが大好きで、みんなを楽しくしてくれる存在です。

「新学期」「年中組」などという区切りは私達が都合上つけてしまったもの。それで、「今日からはお兄さん」なんて言われても、子どもにしてみたらずいぶんと、無理な話です。それぞれの持っている力に合わせて保育してきたつもりでしたが、子どもにとっては、一日一日が精一杯生きている小さな区切りで、それがただずーと続いているだけで、その中でゆつくりと成長しているのに、と反省しました。ちょっとがんばりすぎてしまった年度始めでした。

(城北幼稚園)

保育参加ウィーク「三勝二敗」

入江 礼子

一学期も終盤に近づいた六月末の一週間「保育参加ウィーク」と銘打って、今年から兼任している幼稚園で保護者に保育に参加して頂いた。午前中の二時間半、保育に入ってもらい、その後、園長、副園長と共にその日の保育のこと、子どもたちのこと、幼稚園の方針等について話し合う。そして最後の日の

午後、今度はクラス懇談会で担任とも話し合いの場を持つという企画である。今の幼稚園のありのままを見てもらうことで、保護者と幼稚園が共通の話題を持つ。そのうえで共に子どもたちを育てていきたいという願いがあつてのことであつた。

「保育のありのままをみてもらう」ということは簡

単なようで実は難しい。特にこの園の場合は私が引き継ぐまでの保育を支えていた保育観と私自身の保育観にかなりの開きがあったので、この保育参加ウィークを実施するにあたってはかなりの勇気がいった。その上に、この園で既に一、二年間を過ごしてきた保護者の方のとまどいと反発が予想されたからである。

「三十年前の幼稚園にタイムスリップした」それがこの園に入つての私の率直な印象だった。九時までに登園、そして整列をしての体操、週に一回は園長の話と続き、それが終わるとクラスに入り、朝の集まり。その後はクラスごとの活動。二時の降園まで、一斉活動の合間にしか子どもたちは園庭で遊んでいなかった。幼稚園の中に足を踏み入れて気付いたことは、保育室の前に固定遊具が並んでいることだった。それ以上先の園庭には出るなという子どもたちへの無言の圧力のように私には感じられた。こ

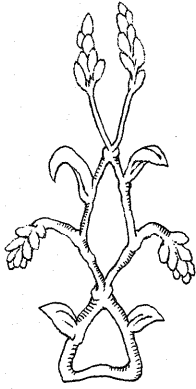
の園の評判は「園児のお行儀がよく、きちんとしていゝ」「しつけに厳しい」というものであり、保護者もその方針に賛同して入園を決める方が何人もいゝ。そういうことは分かっていたが、だからこそ「なんとか子どもたちが園庭で遊ぶ園にしたい」という思いを副園長のNさんと共に強く持った。

この思いを実現すべく、園の先生方と話し合つた。三、四、五歳児をあわせても六十人という小規模園で担任は四人（二十代前半から三十代前半）、主任は一人（五十代）という構成である。そこに園長、副園長という形で併設大学の教員である私たちが入つた。

主任は他園の保育の経験者で、子ども主体の保育の体験もある。しかし担任はすべて新任のときからこの園で保育をしており、他園の経験はない。もともとポトムアップというよりはトップダウンの風土のなかで、ここ二十年以上は先程述べた保育の形態

が続いているので、教師は保育の中に子どもの主体的な遊びを中心にした時間というものがあるということを知ったことはあっても実際には見たこともないわけである。そんな状況ではあったが、今年からは午前保育の時でも四十五分から一時間位、通常保育のときはせめて十時半くらいまでは、子どもたちの主体的な遊びを中心にした時間にして欲しいとお願いした。

「きつとの方が子どもたちのことがよく見えてくるから！」と半ば強制的ではあったが、私達の方針を伝えたわけである。このとき教師の方から反論はなかった（トッブダウンの風土のためか……）。子



どもの主体的な遊びを中心とした時間を充実させるためには教師の環境構成や準備、配慮が欠かせない上に、それぞれに遊び込む子どもたちに対する指導となると教師の力量がかなりでないと放任という落とし穴にはまってしまふ。そこに落ちないためにも、私も含めた教師の力量ということでは一時間半が限度だとも考えた。

それともう一つ、保護者の問題があった。先程述べたように、この園には園に「しつけ」を求めたり「規律」を求めて子どもたちを入園させている親も少なからずいるわけである。その親たちが、この「子どもたちが主体的な遊びをする時間をとる」ということに対してどのように反応してくるかは火をみるよりも明らかだった。

今回のもう一つの大きな変更点は「マジックミラー」を使った親の観察日を廃止するというものである。この園の各保育室には「マジックミラー」

ム」がついている。幼児教育の研究に使うためではなく、保護者が子どもに見られないようにそこに入って、幼稚園での子どもの姿を見て頂くために使っていたようだ。保護者には魅力的な「子どもに見つからずに子どもの姿をみる」ということが子どもの人権にもかかわることと考えたからである。

四月に保育が始まったとき、今年からの保育の変更点として特に前記二点を説明し、このような変更はあっても、「子どもたちを大切に育てたい」という思いは変わらないという旨を説明した。その時点で特に五歳児の親たちから「きちんとしているから入園させたのに！ それでは約束違反です！」等のブーイングが出た。私たちは「子どもたち一人一人が主体的に遊んでいるところから子どもたちの個性も今まで以上に教師にもわかり、それが細やかな保育姿勢となって、設定保育の場面でも生かすことができるのです」というような言い方で昨年度と変わ

らない部分があるということを伝えた。

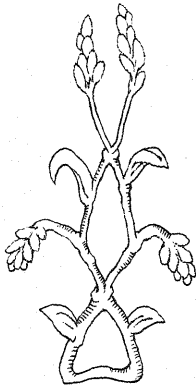
しかし「今年から園の方針が変わる」「マジックミラーで子どもの姿をみることも出来なくなるらしい」ということになる保護者の目には「かわった」部分しか映らなくなっていく。四月後半に開いたクラス懇談会はかなりの緊張感をもったものになった。そのときを経て、ともかく教師たちとは園内研修等の保育についての話し合いを恒常的にすること、また保護者とは極力話し合いの機会を持つということで月に三度ほど、園長、副園長と話す会を始めた。

保護者にとって一番気になるのはやはり幼稚園での子どもの姿。話し合いの度に保護者からは子どもたちの姿をみたいという声が上がった。私たちとしては、本当は園を保護者に開放するのはもう少し保育の質が上がってからにしたいというのが本音であったが、発想を切り替えて「ありのままを見て

らって話し合ってみよう」ということで「保育参加ウィーク」を実施することにした。

保護者には「参加でも参観でも、どんなスタイルでもいいですから、幼稚園に遊びに来てください」と伝えた。一週間のうちの都合の良い一日に来て頂くことにしたところ一日あたり十名前後の保護者が訪れた。この一週間は梅雨の中休みとなり毎日毎日三十度を越えるような蒸し暑さとなった。そんななか、すっかり遊び仕度をしてくる保護者と参観のみと心に決めてくる保護者に大きく二分されての保育参観ウィークとなった。

「三勝二敗」とは保育参加後の話し合いで、今まで



の二ヶ月間の保育をとりあえず肯定するような発言が多く出された日と否定的発言の多かった日の割合である。話し合いは年長、年中、年少の区別なく参加された方で時間の許される方全員に私たちが参加するかたちで行われた。

肯定的意見の多くは、「体を動かして参加」された保護者から挙がった。「子どもと一緒に体を動かしてみても、あれだけドッジボールにこだわっている娘の気持ちが変わりました」「子どもが毎日毎日泥団子を作ってくるので私もやってみたのですが、これって修行がいるんですね。一日で出来ることではないことがよくわかりました。それに子どもたちがこの土を使ったらよいかをよく知っているのにびっくり」「お母さん、遊びたいなら入れてあげてもいいよと言われ、ああ、ここは子どもの国なのだと思います。もっとお母さんって来てくれるかと思っていたのに……」「子どもって一生懸命なんで

すね。こういう姿は観察室からはわからなかった」
「遊ぶようになってお弁当をよく食べるようになって嬉しいです」「毎日毎日寝る前に明日は幼稚園で〇〇をするんだ！と言って眠るようになったんです」等々。

また子どもとは遊ばずに立って見ていた保護者からは「やっぱり、去年よりお行儀が悪くなっていますね。まえに逆戻りしたみたい」「みんなそろって朝の挨拶もしないで遊び始めちゃうんですね。メリハリがなさ過ぎますよね」「年長でこんなに遊んでいたんでは小学校入学が思いやられます。せめてそういうことをもう少し意識して欲しいです」「遊ばせすぎだと思えます。娘は決まって水曜日になると疲れて目の下に隈を作ってしまうんです。お願いですから、もっと遊ぶ時間を短くしてください！」。

あととはどちらの保護者からも「先生の働きかけが弱いのではないか。もう少しかわわると子どもたち

がもっと楽しく過
ごせると思います
よ」「お部屋のな
かがなんだかがら
んとしてお部屋に

いる子どもたちもいるのだけれど、なんだか手持ちぶさただったみたい。先生方もみんな外に出払っているの、私、一緒に遊びました」等々、今の私たちの保育で抜けたり、欠けたりしているところを鋭く突く意見も出された。

私たちは八十パーセント聞き役にまわっていたが、「ここは元に戻して欲しい」という意見が出るのと、「それはこういう理由でできない」という説明を余儀なくされる面も多々あった。ときにはその白熱した場を持ちこたえるのがやっとなという日もあった。

そして迎えたクラス懇談会。年少組では子どもた



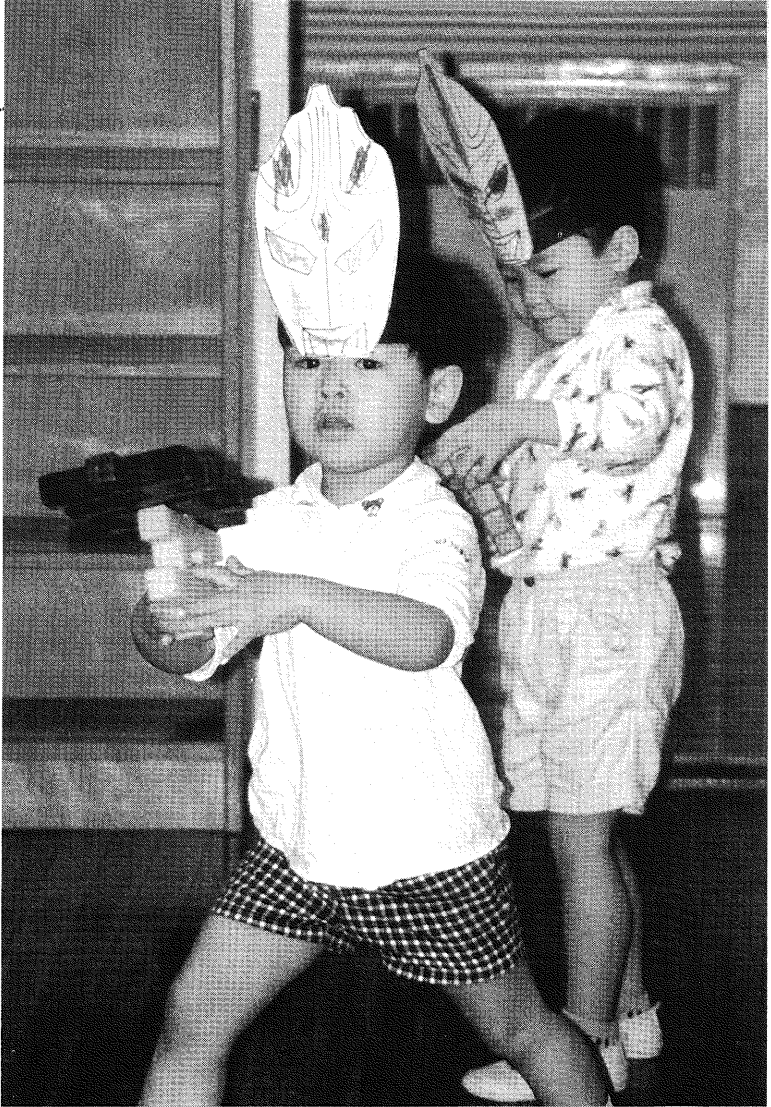
ちの成長は認めるものの担任に対してもう少ししっかり子どもたちをみてほしいという意見が出された。年中組は四月と比べて、子どもたちの成長が読みとれて嬉しかったという意見が多く、和やかに進行した。年長組は四月は保護者対担任という形の懇談会になり担任は苦しい思いをしたので今回も緊張して臨んだのだが、保護者対担任というより、保護者同士がお互いの意見を出し合って白熱した。

保育参加ウィークは緊張の連続ではあったが、何とか持ちこたえたことで、一番の収穫だったことは、保護者たちが自分の意見をお互いの前ではっきりと発言するようになったことだと思う。そこがよいと思っただけで入れた園の保育方針が変わってしまうという大きな転換のとき、私たち園側にその非難の矛先は向けられて当然であろう。しかしともかく語らい、話し合いのときを多く持つことで今までは「この園でのよいことは一つ。それ以外はいけないこ

と」という発想だった保護者が「いろいろあっていい。それを言い合っている」という状況になってきたことは私たちが当初予想だにできなかった大きな収穫だった。

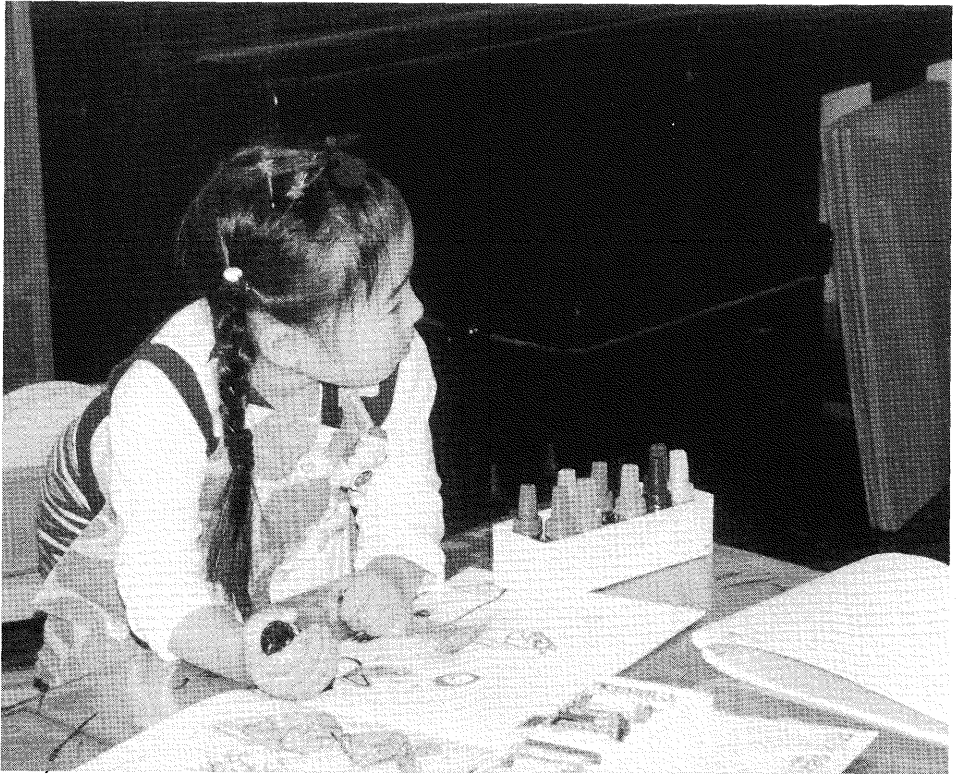
保護者の真剣な目に映った私たちの至らなさ。その指摘を真摯に受け止めて少しずつ保育の力量をあげていなくては……。今は保育の方針で白熱しているが、これが落ち着いて、保護者が保育の内容に厳しい目を向け始めたら「三勝二敗」すらおぼつかないのだから。

(鎌倉女子大学)



ある日

撮影・平野 清





私が幼児教育を志した頃(22)

津守 真

大 学

一九五三年春、児童心理学者として著名なDr.ジョン・E・アンダーソンの発達心理学上級セミナーに私はいままでもない満足感を感じていた。セミナーは先生の自宅で行われた。先生の家の三階が小さなセミナー室になっていて、書棚に囲まれて大きなテーブルのまわりに毎週七、八人の大学院学生が集まった。夫人がいつもコーヒーを用意して下さった。先生には七人の子どもさんがあり、日々の保育については子ども
の自発性を重んじる優しさをもっておられることがすぐに分かった。長男は新進の教



学者として当時すでに知られていた。先生は心理学の側からの当時の進歩主義教育の支え手であった。米国教育協会の一九四六年次報は幼児教育の特集で、巻頭に先生の論文が載っていた。先生は心理学の理論家として学会で定評があり、大学院学生たちからも尊敬されていた。ミネソタ大学にはサバティカルという制度があり、七年に一度休暇が取れるが、その期間は給料も減るので、多勢の子持ちの先生は一度もそれを利用されたことがないというのは学生の間でも有名な話だった。

セミナーでは、毎回当番の学生が心理学の理論を一つ選んで発表し、先生のコメントがある。私は、アーノルド・ゲゼルを担当した。私は日本にいた当時、日比谷のCIE図書館と愛育研究所でゲゼルの書物は殆ど読んでいたので発表に苦労はしなかったが、大学院学生の中にイエール大学のゲゼル研究所で勉強していた少壮気鋭の学者がいて、心理学の観点からゲゼルに対しては厳しい批判をした。ゲゼルの研究は統計学的に欠陥がある、ゲゼルには心理学の理論がないなど、彼の批判はあたっていているとも思った。しかし小児科医でもあるゲゼルは、乳幼児の臨床経験についてはミネソタ大学のどのスタッフよりも豊富だった。当時日本でも、乳幼児の具体的な発達を語るときにはゲゼルの資料が引用されるのが普通だった。だが、アメリカにいてそのことを考えると、風土も文化も違う日本で、アメリカの研究者の作った資料を引用するよりほかないのは情けないことではないかと私は思った。ゲゼルのような臨床経験を



得るには長い年月を要するが、心理学の検査法を応用して日本の乳幼児の発達の実態を整理するのは簡単なことだから、日本に帰ったらこれだけはすぐにやっておこうと私は考えた。卒業の時期も近づき、私はしばしば日本に帰ってからの研究を考えた。私は紙と鉛筆だけの研究ではなくて、実際の子どもにふれて研究したいと思っていた。社会の冷たい現実に直面して、その現実に温かい心を吹きかけて行くのでなければ、児童心理学の研究とは言えないだろう。セミナーからの帰路、春の快い空気を吸って、闇の中のエルムの並木の間をゆつくりと歩きながら、日本に帰ったら日本の土から芽生える学問に取りつこうと私は自分の胸に言い聞かせた。

米国における進歩主義教育の論文

一九五三年春は、私は特別に忙しい日々を過ごしていた。

私は進歩主義教育の歴史を跡づけることによって、遊びが幼児教育の基本であることを歴史的に確認できると考えていた。心理学はそれを更に前進させることができるだろう。私の「進歩主義教育の歴史」の原稿はほぼ出来上がり、所定のオニオンペーパーにタイプで清書するばかりだった。私は自分のタイプライターを持っていなかった。私が泊まっていたピルグリムファウンデーションのシュタウファー若夫妻は、買いたての新しいタイプライターを私に使わせてくれた。数週間かけてタイプを



全部打ち終わつたときには活字が磨滅して全部取り替えなければならなかつた。私が新しいタイプライターなのにと恐縮するとシユタウファー夫妻は、だれが使つてもとどき取り替えるのだからと言つて笑つて済ませてくれた。表紙をつけてきちんとしてたらとても立派になつた。

ミス・アボット姉妹

四月九日の日曜日の夕、二人の老婦人ミス・アボット (Miss Abott) 姉妹にサンデーデイナーに招かれた。アボット姉妹は、長年、ミネアポリス幼稚園協会によつて設立されたミス・ウッズ・スクールのセクレタリをしておられた。これは幼稚園と小学校の教師養成のために一八九二年に創立された学校である。スーザン・プロウとパティ・ヒルの進歩主義教育論争のなされていた時代で、新しい幼児教育の推進に一役買つていた。私が米国の進歩主義教育の歴史を論文に書いていることを、大学ナースリースクール主任ミス・ニース・ヘッドリーから聞いて招いてくださったのだった。たいそう年寄りに見えたが、二人とも六十五歳くらいで、すでに退職して二人きりで暮らしておられた。私に身を寄せるようにして多弁に話された。私は戦後の日本でどうして進歩主義教育に関心を抱いたかを話した。帰りがけに書棚からどれでも好きな書物をあげようと言われ、私はフレーベルの『母の遊戯と愛撫の歌』の一八九五年出



版の英訳本を頂いた。ウイリアム・T・ハリスの序文がついていて、スーザン・ローの訳で、フレーベルの哲学についてのプロウの解説がついていた。進歩主義教育はフレーベルを否定したのではない。むしろフレーベルの精神にもどって新しい学問によってその先を作ろうとしたのではないか。そんな考えがあつて私はこの本を選び、頂いた。私はその本をいまも大切にしている。ミス・アボット姉妹は、幼稚園運動及び進歩主義教育の時代を身をもって生きてこられた歴史の証人だったのに、私はそのときは自分の論文を書くのに忙しい最中で、多くを尋ねる余裕もなかったことを残念に思う。私がミネソタ大学で勉強していた時は、スキナーの行動心理学はまだ縮についたばかりだったし、ピアジェがミネソタ大学のフラヴェル教授に紹介されて米国に登場したのはそれから十年も後のことである。進歩主義教育のその後についてはこれらの新しく台頭した科学的心理学との関連のもとに続きを語らねばならない。

日本からの客

この頃、相次いで日本の有名人の講演会が大学小講堂で行われ、私はトンプソン夫人と聞きに行った。どれも要領を得ない講演で、その人が何を話そうとしている話か分からなくて失望した。言語のハンディキャップもある。日本人の謙遜な話し方も原因になっているかもしれない。私も英語はまずいし、同じ悩みを持っている。それに



しても、原爆にも触れず、平和をも話題にしない、日本人としての意見を聞かれても、着物とすき焼きだけが日本の文化のようなことを答えて、時流に乗るよりほか政治的洞察をもたない。たとえ言葉が下手でもいいから意見だけはしっかりともらいたいと、私は生意気なことを考えた。日本人はだれでも日本という小さな社会に縛られている一人の人間にすぎない。日本のなかでは当然のことが世界の光に照らすと通用しないこともあることを私は痛感した。日本の国が貧乏すぎるというのも悲劇で、日本のどんな金持ちも、アメリカに来たら金持ちではない時代だった。

この学期は私は大学で日本文化の講義を聴くことになった。英語で「MURASAKISHIKIBU」と言われてもそれが「紫式部」と同一人であると考え至るのには時間がかかった。アメリカ人に日本を伝えるのはなんとむずかしいことか。この講義に触発されて、私は日本について書かれた英語の書物を何冊か読むことができたのは収穫だった。岡倉天心(覚三)の「Awakening of Japan」の『日本の目覚め』の英文は素晴らしい。明治人の英語力はたいしたものである。チャールス・エリオット卿 (Sir Charles Eliot) という日本のイギリス大使の著書に『日本の仏教』(Buddhism in Japan) という書物がある。この人は一九三四年に、日本からヨーロッパに帰る途中の船のなかで病死して、シンガポール沖で水葬にされた。この人の大使館付文官として日本にいたのが G・S・サンソム (G.S. Sansom) である。この



人の著書に『西欧世界と日本』(Western World and Japan)がある。私共が学校で学んだ日本の歴史とは違った視点から書かれていて面白かった。しかも日本の歴史と人間に対する愛情が溢れている。このように異なった文化の中でも通用する日本文化論が欲しいと私は思った。

三月十九日に、お茶の水女子大学附属幼稚園の及川先生から手紙を頂いた。「庭の桜の並木は今満開で、実に美しいです。藤棚近くの山の上に山椒が美しく咲いております。緑と桜の美しいなかに可憐なかいどうが赤く可愛く咲き誇っております。先生はいかがお感じ。春はこれからです。ことに人生の春は殊更。」倉橋先生からはときどき短い便りを頂いていたが、及川先生からの手紙ははじめてで懐かしかった。三月二十二日には三月というのにまた吹雪で、せっかく伸びかけてきた木の芽がまたすっ込んでしまわないかと案じた。父からの手紙に「大器晩成」と書いてあった。吹雪の日には『キンダーブック』が届いて嬉しかった。子どもの絵本は日本からの最善の使節である。

高校生への講演

この頃は何度も高校生に話をする機会があった。

ミネアポリスから一五〇マイルほど西のモリスという人口四千人の小さな町の教会



学校で話した。前の晩からハンセンさんという若い牧師の家に泊めていただいた。シャロンという小学校六年生の女の子と、ブッチュという二年生の男の子、それに三カ月の赤ん坊がいた。シャロンは赤ん坊の世話をよくした。ブッチュは、自分のベットと寝室を私に提供したことが大得意だった。シャロンとブッチュはかわるがわる自分たちの宝物を見せてくれた。野球の選手の写真、飛行機の写真、レコードをお腹の中に備えた人形、卵の殻に自分で絵の具を塗って作った小さな人形などなど、子どもたちとの会話は楽しかった。小さな町にただひとつしかない小さなレストランで、この愛すべき家族と一緒に食事をご馳走になった。何組かの家族たちがハンバーグやホットドッグを食べていた。夕食を終えて、夜のバスで私がミネアポリスに帰るときにはブッチュが泣き出して止まない。シャロンは自分と赤ん坊を日本まで連れて行けという。ひと騒動のすえ、バスの停留所まで家族で送ってきてくれて別れた。個人の友情には国籍も人種もない。(十数年後にシャロンから結婚式の招待状が届いた。私は勿論行かなかったが、しばらくたって美しい花嫁姿の写真が送られてきた。)

二月から三月にかけて私は毎週のように教会の高校生のグループで日本の話を頼まれた。戦争中には互いに敵と思っていた人とも、直接に会って話しをすれば同じ人間だとすぐに分かることをテーマとして話した。しかし戦争も敗戦も知らないで、美しい市ミネアポリスで育った幸せな子どもたちにとっては、この前の戦争はもう過去に



なりつつあることを感ぜざるを得なかった。

マッケンシユタット家

一九五三年三月二十三日には私はネルソン家からマッケンシユタット家に引っ越した。

アール・マッケンシユタット氏は市街外れの大通りにドラッグストアを経営していた。薬剤師の免状を持っていて、長年、ユダヤ人のドラッグストアで働いていたが、十年ほど前からドラッグストアの経営者は薬剤師の免状を取らねばならぬという法律ができて、そのユダヤ人が店を売ってカリフォルニアに移住した。その機会に、長年かかってためた金で別のドラッグストアを買って自分が経営者になったのである。マッケンシユタット氏は美しい白髪の、私くらいの背丈の紳士で、正直で、小さなほどに善良な人だった。

マッケンシユタット夫人は典型的な中年アメリカ婦人の体型で、頭のいいしつかりした、そして実のある婦人だった。三人の子どもたちは皆成人して、いまは二人だけで古い家に住んでいた。息子は日本に占領軍の兵隊として来たことがあるとのことだった。私はちやうど卒業間際の多忙を極めていた時期で、始終夜遅く家に帰った。それを夫人は心配して、勉強し過ぎないように、ひとつの体ですべてのことをするこ



とはできないのだから無理しないようにと始終言ってくれた。私が学校から帰ると、いつもベットがきちんとつくられていて、私の婚約者の写真が枕もとにかざってあった。マッケンシュタット氏は従業員を三人も使っていたので、一日おきに夜十時まで店に残って、自分で店を閉めてから家に帰った。帰ってくると私と同じくらいの時間になることが多かった。そういうときは、マッケンシュタット氏は帰りがけによく店からソーダ水とアイスクリームをぶら下げて帰って来た。ソーダの中にアイスクリームを入れて食べるとなかなかおいしい。三人でよもやまの話をしながら夜遅く食べるアイスクリームソーダはなかなかおつなものだった。

マッケンシュタット夫人は私がひと月で次の家に移るのを悲しんで、私が家で食事をするときにはいつも大御馳走を作ってくれた。その頃はアメリカでも家庭料理を作るのを楽しむ人が多かった。日本に帰ったら、あまりいろいろのことに張り切り過ぎてはいけない。殊に最初は家庭を作ることが大事だ。一人の人がすべてのことをできるものではない。公のことは何もしないでいいから家庭を作りなさいと言ってくれた。

数か月後に、私がミネアポリスを発つて日本に帰るときには、マッケンシュタット氏は店から荷造り用の箱と縄を持って来て、三日間もかけて荷造りを手伝ってくれた。そういうときはマッケンシュタット氏は実に手際よく、私は大助かりした。

いま、子どもたちは

大人たちが誇りをもつて

大人本意に堂々と生きればいい！

今井 嘉江

自分探しの探偵事務所

“シャーロックホームズ”の誕生

“大人から子どもまで誰もが集える場を……”と
自宅のワンフロアを開放した。

そのスペースの名称を“シャーロックホーム

ズ”とした。

“自分はなんなのか、なにをしたいのかをここで
出会った仲間と共に探っていく……、自分探しを
する“名探偵”を自分の中にもつけるため
に……”。

開設したのは四年前（一九九八年）。

一年目はイベントや講座などさまざまな催しを展開し、その存在をアピール……。イベント盛りだくさんの年。不登校の子どもが飛び込んできてホームページまでつくってくれた。

二年目はそのさまざまなイベントを通して出会った人どうしがネットワークをつくりはじめた。地域のイベントの事務局まで委託された。り……。大忙しの年。

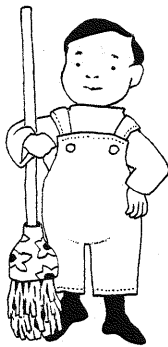
三年目はさらに活動が広がり、カンボジアで開催されたアート展にボランティアとして参加したり、中高生が中心になって「子ども事務局」まで立ち上げてしまった。その名は「コミュニケーション」。人と人とのコミュニケーションを大切にしたいという思いからだ。

こうしてそれぞれがそれぞれの力で歩み始めた四年目。このシャロックホームズの歩みは「人が生きる」「人が育つ」ということを実感してい

くプロセスでもあった。こうしたプロセスを子どもたちと共に体験していくこと……。時間を共有し、感動を共有していくこと……。それが「子どもが生きる力」を育てることであり、大人自身も成長する。これこそ「教育の原点」ではないのだろうか。

中学校の相談室から見える景色

もちろん景色といっても、わたしが現在通っている都内の中学校の相談室の窓から見える校庭の木々たち……ではない。ただわたしの相談員としての存在は学校という同じ箱の中にありながら、子どもたちからみたら、特に教員からみればよそ



者。だからこそ子どもたちの声や教員の叫びが聞こえる。あたかも学校という景色を見ているかのように……。

まず、それぞれの“育ち”がみえる。それぞれの“悲しみ”がみえる。

“大人たちのうそ”がみえている生徒たちがいる。その“大人たちのうそ”を見抜いている生徒たち“の姿がみえてない教師たちがいる。

いじめや学級崩壊はこうした生徒と教師のズレから、当然起こるべくして起こっているように思う。

育った国が違う、生まれた国が違うことでいじめを受けてきた生徒……。 “超ムカツク”と訴えるその一言の言葉の陰に日本人の持つ偏見という人権感覚のなさというか非常にお粗末な人間性を感じざるを得ない。相談室にいて最も哀しい瞬間である。



こうしてお粗末な恥ずかしい人間性を育ててきたのはまさにわたしたち日本人の大人たちの意識や価値観に基づく生活の中からつくりだされてきたものであり、その反映が現在の子どもたちの表情や態度につながり、ひいては昨今のマスクミが群がるような事件の数々にもつながるのではないかと思っている。大人たち一人一人の責任は大きい。社会はわたしたち一人一人のあり方から構築されているのだから……。

優しい虐待？

虐待、DV……、暴力は夫から妻へ、親から子

へ、子から親へ、教師から生徒へ、生徒から教師へ……。えつ、一体どこの話？……。

中学校の相談室で、わたしが主宰する親子教室で、そしてシャーロックホームズで、保健所で……。わたしが現在かかわっているさまざまな場で容易に知ることのできる事実である。特にわたしが気になるのは教師から生徒への言葉による虐待。同様に親から子への言葉による虐待。

どちらにも共通している怖さは本人（教師・親）に虐待しているんだという自覚がないこと。生徒の為に……。子どもの為に……。良かれと思っ
て言っている優しい言葉。その言葉のもつ恐ろしいメッセージに大人たちは気づいていない。

それは大人の側の勝手な大きな期待であったり、歪んだ怒りであったり、憎しみや恨みであったり……。

こうした大人たちの勝手な期待がどれだけ生徒

や子どもたちを責め、苦しめているか……。教師間の苛立ちや自分を理解してくれない夫に対する怒りや憎しみ、恨みを歪んだかたちで生徒や子どもたちに反映している……。それも虐待というかたちで……。

そのことに気づいている大人は極めて少ない。たとえ気づいたとしてもついついやってしまう。

“この子のため”という大義名分のもとに……。こうして傷ついた子どもたちがとる行動は容易に想像がつく。

人を傷つけるか……。自分を傷つけるか……。いじめや犯罪を繰り返すか……。ひきこもりや摂食障害等になるか……。

まさに現代の社会状況そのものである。

子どもたちのメッセージから受け取るもの

シャーロックホームズに寄せられたメールか

ら……。

“前提的な過剰と根本的な欠落、それが現代の

テーマ”

“自意識の主張とコミュニケーションの欠落”

“『開き直り』あらため『なげやり』”

不登校を経験したある青年の言葉から……。

“ぼくのまわりに一人でも謙虚な大人がいたら

……不登校にならなかつた”

シャーロックホームズの子どもたちの話し合い

から……。

“みんながかけがえのない“今”という時間を共

有し、悩みながらも楽しもうとして努力している

意識がある”

さらに子ども事務局の発行した小冊子

“talking butterfly”の表紙にこう書かれている

“自分のこと好きですか？”と。

国全体が方向性を失っている今、自信をもって

生きられない大人たちのなかで子どもたちも混乱し、人とかかわりに怯えて生きている。

大人も子どももみんな自分を大事にしたいと思っているし、人を大事に思っている。本当のコミュニケーションをとりたいと思っている。真の豊かさは人とかかわることではしか生れないし、傷ついた心は人とかかわることではしか修復できないのだから……。

大人自身もつと誇りをもって大人本意に堂々と生きればよい。少しだけの謙虚さをもつて……。
(シャーロックホームズ代表)

シャーロックホームズの連絡先は次の通りです。

URL <http://member.nifty.ne.jp/sharlock-holmes>

mail azil4352@nifty.ne.jp



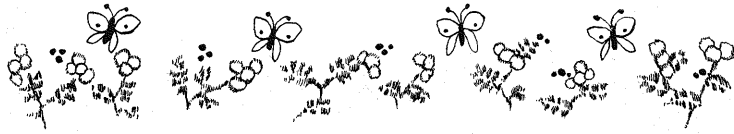
『幼児の教育』と私

思い出すままに

井上 直子

お茶の水女子大学の門を足早に入り、附属幼稚園（日本幼稚園協会）の郵便ポストへ。「ない!」、幼稚園の中の津守先生の研究室へ小走りで……。『きてない!』、庶務課へダツシユ。依頼して、届いているはずの原稿が、どこにもきていない。一つも……。『原稿どこ!』と走りながらなぜか学生食堂、本校舎へと大学中を走りまわっている私。原稿をお願いした先生にお電話すると「えっ、頼まれていませんよ!」「ガン! どうしましょう。又、私のせいで休刊! 津守先生、ごめんなさい……」(夢)。

どきどきしながら目がさめ、ほっとする。そんなことは、実際には一度もなかった

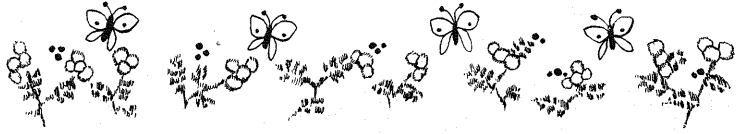


のに。編集の実務（第六十四巻から第七十巻・九六年間）から遠ざかって、約三十年がたつのに、未だに同じような夢を時々見るのです。

津守先生から、前任者の木原（赤池）さんが大学院に席をおかれたので、その後を、と私にお声がかかった時、どのような事をするのか、全くわかりませんでした。学生時代から『幼児の教育』は、教科書のように読んでいましたが、実は、編集スタッフは、五、六人いて、実務をなさっているものと思っていましたから、たった一人で実務をとうかがった時、目が点になったのです。木原さんは、明るく「だいじょうぶよ、私にできたのだから……」と淡々とおっしゃられます。

実家が幼稚園をやっていましたので、子どもの教育に関わっていきたくて考えていました。そのためにもより多くのことを学びたいという気持ちは、人一倍強かったです。思っています。私のそんな気持ちを津守先生が察して下さったのだと思います。

その頃、津守先生は、倉橋惣三選集（第一巻～第四巻）の編集も手がけていらして、毎日、膨大なペラ刷りに目をとおしておられました。その表紙及び扉の字と絵を東山魁夷画伯のお宅にうかがっていただいていたと、私に原画を見せて下さりながら、東山画伯が、かざらない、実におだやかな方……など、又倉橋先生と東山先生との接点などぼつぼつ話して下さいました。私は、銀座の松屋で開かれた東山魁夷展（昭和三十六年五月）を見に行き、すっかりファンになっていました。その原画は、

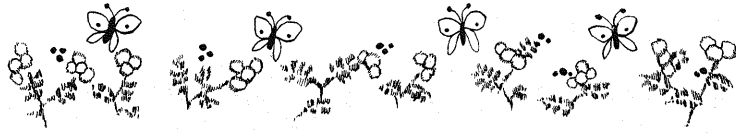


図案化されたくじやくのような、かんむりばどのようなとりで、単純で、愛らしく、品がありました。東山先生が、倉橋先生のイメージを一点に表わされているのだと感じました。倉橋先生が、長い間『幼児の教育』の編集主幹でいらつしやり、先生のお考えが、子どもの教育の本質についておられる事を、津守先生はじめ、多くの先生方から学んでもきていました。不安は大きかったのですが、学ぶ事もつと大きい……。津守先生とお話していくうちに、やってみようと思っていました。

先日、この原稿を書くにあたり、いくつか確認したい事がありましたので、附属幼稚園の榊田先生のご了解を得て、当時、私が関わった第六十四巻から第七十巻までを中心に見せていただきに園長室（創刊号から一年分を一巻として製本されている）にうかがいました。第一〇〇巻の中の六、七巻、私に関わった前も後も連綿と続いているのです。何と多くの方々がご執筆下さっている事か。編集のお手伝いできました事、本当にうれしく思いました。改めて、一〇〇巻おめでとうございます。

倉橋先生の書かれたもの（書物）、先生に関する事を書かれたもの、先生のお教えを受けた方々の書かれたもの、今、読みかえしても、新しい事におどろきます。附属幼稚園の先生方も毎日とてもお忙しいのに、毎年六月号には、現場の保育を報告して下さいました。

巻頭言を書いて下さる先生方、多くの心理学者、教育学者、保育学会の方々、現場



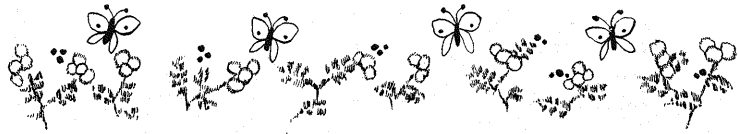
の先生方、他の分野の方々と、津守先生は、多くの協力して下さる先生方をお持ちでした。一〇〇巻一月号で編集方針を改めて、読ませていただきましたが、毎月、毎月の事なので、そのご苦労は大変な事だったと思います。原稿依頼の打ち合わせをしたり、お目を通された原稿や先生の原稿をいただきに、白金のお宅によくうかがわせていただきました。

編集にたずさわってまもなく、六十四頁から七十二頁（第六十五巻第四号）になりました。八頁増えたのです。大変と思う反面、少しでも読みやすいようにと思いました。表紙の次に扉をもうけ、目次を見開きにし、余裕を持たせたり、幼児の日常の姿を撮った写真の頁、子どもの詩の頁と、読み手がほっと一息つける頁を考えました。扉、目次、子どもの写真など今に続いているのですね。

第七十巻一月号より、附属幼稚園の園長・周郷先生、本田先生、附属幼稚園の先生方も加わって下さり、編集委員会が持たれるようになりました。私は、その何か月か後に、実務の仕事をお問さんをお願いし、辞しました。

私は、この六年の間に、本当に多くの方々に学ばせていただき、お世話になりました。この仕事に就かなければお会いする事もなかったであろう多くのすばらしい方々にお会いすることができました。

千葉大学の園芸学部の浅山英一先生は、ご自宅の広い温室に私を案内して下さい、



観葉植物の名前や育て方、株の増やし方等熱心に説明して下さいました。

チューリップのユング研究所へ留学され、帰られたばかりの秋山さと子先生の新宿・若松町のお宅に原稿をいただきにうかがった折、「まだできてないの。今書き上げますから」と、広いじゅうたんをひきつめたがらんとしたお部屋で、外国の絵本を何冊か出して見せて下さいました。今住まわっている所が、ご実家のお寺の敷地内であり、子どもの頃の遊び場であった事、ユングの夢分析を学んでこられた事など興味深いお話をうかがう事ができました。その後、数多くの研究書を出され、私も手にとらせていただきました。今、冒頭の私の夢をお話したら、どんな分析をして下さったのでしょうか。訃報をお聞きした時、笑顔と赤いブレザーを召した先生のお姿が目にかびました。

私は、辞した後、結婚、出産。主人の転勤でアメリカのシアトルに四年程住み、帰国。実家の幼稚園にもどり、幼い子どもたちとの毎日が続いています。子どもたちと接する時、「子ども一人ひとりになまの人間としてふれる事。子どもが心を開いてくれるように。子どもの心の中に湧き起こるすばらしい力を見る目、聞く耳を持たなければ、それを伸ばす事はできない。子どもと心を通わせ、子どもから学ぶ姿勢が大切」と、津守先生がいつもおっしゃられ、実践されていた事が基本になっている自分を発見し、感謝の気持ちで一ぱいです。

(大崎幼稚園)

目をこらして (18)



「お母さん！ 今ね、何かが爆発したんだよ。パーンって音がしたの。誰かが何かしたのかなあ。かずほびつくりしちゃった！ まだドキドキしてるよ。」

携帯電話から娘の声がとびだしてきた。

爆発とはただならぬ出来事。「大丈夫？」と聞き返すと

「うん大丈夫。下の方見ておくから（我が家は三階）ね。

また何かあったら電話するね。うん、外には出ないから大丈夫だよ。」

と、まるで事件記者のようにはりきった声で電話を切った。

それっきり電話は鳴ることもなく、私は少し心配しながら

家に帰り、「大変だったね」と娘に話しかけた。

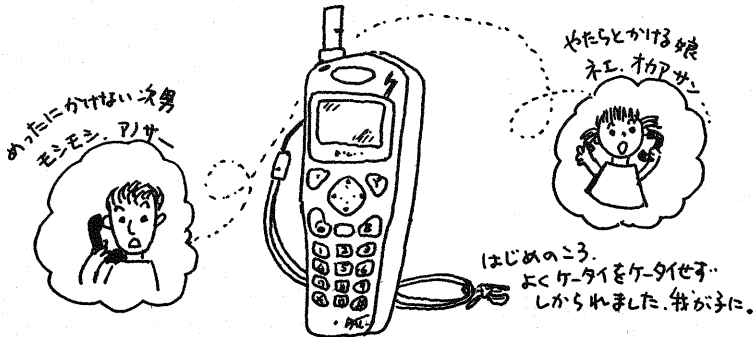
すると、のんびりテレビを見ていた娘からは「あれね、

花火の音だったらしいよ」という答えが返ってきた。もう

すっかり興奮は冷めていた。

*

共働きで子育てをしてきた。朝は私の出勤が早いいため、夫が子どもたちを保育園に送ったり学校へ送り出したりしてきた。朝は、常に危機と隣り合わせだった。





耳をすまして

用意周到とは決して言えない我が家においては、さあ行こうという時になって見つからないものがある、ということがよくあった。

「お母さんに言っておいたのに」と寂しくつぶやく子どもたちと、「もう！」とあせりつつ怒る夫がそこにいた（のんきな私はそのころ電車に乗っている）。

その危機を救ったのが携帯電話だった。

必要性を感じない私と、痛烈に感じる夫と、意見は分かれたけれど持つことにした。

朝、職場へ向かう道でかわいい着信音になる。

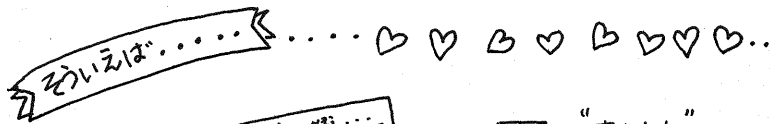
「お母さん、今日ね寒いかな、暑いかなあ」と娘の声。

昼、子どもたちを降園させ職員室に戻ると着信音になる。

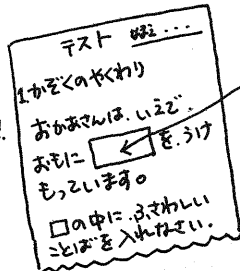
「ねえ、俺の野球の帽子、どこに置いたか分かる？」と息子のかなりあせった声。

ただ声を聞きたいだけの時もあれば、せつぱつまった時もある。「ねえ、お母さん」と呼びかけられる安心感がそこにある。今日もかわいい着信音に耳をすまます。

絵と文 宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）



長男が
小学校5年生
の頃



この□に“あんしん”
と記入していた。



これはお母さん、
安心な手紙だね。
と、
ホロリと涙がこぼれた。
まだ、ケ-タイデ-ジワなんてなかったこの頃



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(十) 『幼稚園創立法』 —— 関信三の幼稚園

『幼稚園創立法』の発見

数年前、国会図書館に調べものに通っていたときのことである。本の出庫を待って手持ち無沙汰になっていた私は、気分転換のつもりで憲政資料室をのぞいてみることにした。関信三の任官に関わる資料が三条実美のもとになにか残っているかもしれない、ふと思

いついたのである。元謀者のなかには三条の斡旋で職を得た者もある。ところが、三条家文書の目録を繰っていた私の目に飛び込んできたのは、「関信三 幼稚園創立法」、という思いもかけない文字だった。

『幼稚園創立法』は、文字通り、幼稚園を創設するための手引き書で、わが国の幼稚園黎明を飾るきわめて興味深い書物である。当時皇子建宮の成長にと

なつて宮内省で幼稚園設立の計画があり、内論を受け
た関信三がその目的のために執筆し、明治十一年四月
に完成したとされる。同年十二月、一般向けに改訂さ
れたものが文部省『教育雜誌』八十四号に発表され
たことよつて、公になつた。しかし、もともとの原本
は、写本が大阪の愛珠幼稚園に一部残つてゐるもの
の、誰も目にすることがない、というまぼろしの本で
あつた。

関信三の幼稚園論の集大成である『幼稚園創立法』
の原本が、彼の隠された生涯をたどる作業の中で発見
された。そのこと自体が私には何よりも感慨深かつ
た。これまでたびたびふれてきたように、三条実美は
キリスト教課者の最高責任者であつた。課者たちはひ
たすら三条の耳に届けるべく、困難な中で何通もの探
索報告書を書いてきた。三条は、キリスト教黙認、解
禁後も、「よくやつた、これからも頼む」と、課者た
ちを勉励し続けたのである。その三条実美のもとに、

『幼稚園創立法』が眠つてゐた――。

かつて課者たちが闇から闇に葬られようとしたと
き、課者豊田道二は小栗憲一に言った。

「実ニ御一新以来許多ノ光陰、只此目的ヲ誤ルノミ、
慷慨悲憤ニ耐ヘス、抑官ヨリ目的ヲ誤ラシムルニ非
スヤ」。

小栗も三条実美に迫つた。

「其实効顯著セサル所ハ廟議ノ変化ニアリ、課者ノ罪
ニ非ス」。

関信三も、これに近い思いを抱いていた時期がな
かつたとは言えないであらう。彼らの人生は政治に翻
弄された。政策の変更によつて、彼らの存在はまった
く無益なものとなつた。いやむしろ、あつてはならな
いものになつてしまつた。しかし、関信三は豊田のよ
うに、「抑官ヨリ目的ヲ誤ラシムルニ非スヤ」という
意識は強くなかつたのではないか。彼らを道具として
利用した政権に対する批判はあつたとしても、彼らの
側もまた政権を利用しようとしたのである。彼は自分
自身がそうした生き方を選択したという認識を、最後

まで失うことはなかった。彼は帰国後、属していた仏教集団を静かに離れた。それは、意志を持ったひとり人間としての無言の宣言だったと私は思う。

その彼が、今、何者の道具でない自由な人間として、かつて「伝言機械」として仕えた三条実美に、「人類の自由と自治」をめざして著した自書を献じた。書庫の奥から取り出された『幼稚園創立法』は、上質和紙を美しいこよりで綴じた端正な書で、はじめて日の光に当たると見紛うほどに真っ白だった。文字は受洗直後に太政官に提出した長い涙告の書と同じ几帳面な浄書。巻末には「東京女子師範学校附属幼稚園監事関信三」という肩書き署名。「我ここに在り」という関信三の声を聞く思いであった。

その頃の関信三

幼稚園が歩み始めた日々のひとつひとつは、ひとり人間としての関信三の新しい出発の日々でもあった。『幼稚園記』出版直前の明治九年六月、長女せい

が生まれた。心休まらぬ長い年月、はじめて家庭を持ち、穏やかな生活を得た関信三が、



日一日と近づくわが子の誕生を心待ちにしなから、与えられた未知の書物を翻訳している姿を想像する。そして十一月、幼稚園の仮開業。一から始めた保育の日々。翌十年七月、『幼稚園記附録』出版。同年十一月、保母たちも子どもたちも幼稚園というものによりやく慣れたころ、皇后・皇太后の行啓を得て幼稚園の開業式が盛大に挙行された。関信三は、いよいよ一層幼稚園の仕事に精根を傾けていた。開業式直前に主席保母松野クララに一子文（ふみ）が生まれた。クララ自身の登園は思うにまかせぬ状態であったが、彼はクララに相談しつつ、日々の保育の橋渡しに努めていた。そうした中で、彼の幼稚園に対する考えは、しだいにはっきりとした輪郭を持つようになってい

く。すでにこの頃には、幼稚園に関する知識で関信三の右に出るものはまったくなかった。

その年の暮れ、次女が生まれた。彼はこの娘をふみと名づけた。二か月前に生まれたクララの娘と同じ名前である。このことから、私たちは関信三がクララを尊重していたことを知る。また、幼稚園の仕事にたずさわり、幼稚園社会の調和の中にいるその時の自分を、彼自身が肯定していたことも知ることができる。

そして、今晴れやかに展開している幼稚園に、同じく新時代を生きるわが子の未来を重ねあわせて、新たな希望を抱いていたことも知ることができると思う。自信と希望に満ちた、彼にとつて最も良い時であった。

このような最高の時に、文部大輔田中不二麿から、『幼稚園創立法』執筆の内論が下ったのである。

『幼稚園創立法』の構造

『幼稚園創立法』は、「緒言」と「設立方法」の二部からなっている。表紙に書かれた書名とは別に、「設

立方法」の部の前に改めて『幼稚園創立法』と書かれていることから、それ以降が同書本来の目的であり、関信三が書くことを求められたものであらうと想像される。「設立方法」は、「屋宇ノ結構」「園丁ノ景況」「什具ノ排置」「玩具ノ供給」「職員ノ責任」の五項に分かれ、幼稚園の設立に関わる様々なことが、具体的、かつ詳細に書かれている。一般向けに改訂して発表された活字版にはないが、原本では、園舎から書籍に至るまでの詳細な費用明細表が巻末に添付されている。すぐにでもそれによって幼稚園が創始できるように用意されていたことがわかる（註）。

しかし、関信三は求められた具体的な設立方法だけでなく、幼稚園教育の一人者として、総合的な幼稚園書を書き上げたいと考えたのだろう。そういう彼の思いが込められたのが「緒言」である。「緒言」は、「緒言」というには頁数も多く、かつ多くはこれまで彼が紹介したことのない新しい分野であった。『幼稚園創立法』は依頼によって書き始められた幼稚園設立のマ

ニユアルであつたが、関信三自身の意図によつて、いはば独立の幼稚園書といふべきものが構想されたのである。彼は同書を、宮内省用にとどまらず、今後開かれるであろうすべての幼稚園の基本型として著した。原本と活字版に見られるさまざまな違いは、前者が書かれた目的の特殊性によるにすぎない。

『幼稚園創立法』については、倉橋惣三氏の『日本幼稚園史』以来今日の研究に至るまで、一貫して、翻訳ではなく著作、すなわち幼稚園に関する日本人初の書き下ろしであるとされてきた。もちろん、『幼稚園創立法』は、その構成からみて、何らかの外国文献そのものの翻訳であるということはありえない。たしかにその意味では、同書は関信三の著作であつて、訳書ではない。しかし私は今回の関信三研究の過程で、彼の幼稚園理解の根拠を知るためには、彼が読んだ幼稚園文献の全体象をつかむことが必要であると考え、それを試みた。その作業を通して、『幼稚園創立法』の多くの部分が、多数の英語文献を翻訳したものの組合せ

から成り立っていることを知るに至つた。「緒言」に限つていえば、これらは全て翻訳である。また「設立方法」の骨子も、多くは外国文献に依拠している。

しかし『幼稚園創立法』に関していえば、著書か訳書かという問題は、それを論ずること自体に意味はない。それを考えることが日本の幼稚園論の本質にふれるという認識に立つて、初めて意味を持つ問いとなる。そうすることによつて初めて、著書でもあり訳書でもある同書の価値を、歴史の中に正當に位置づけることができるのではないかと思う。

園長の職責

すべて外国文献の翻訳であつた「緒言」に較べて、「設立方法」には、外国文献に学びつつも、関信三自身の幼稚園に対する考え方が大胆に表明されていておもしろい。関信三は『幼稚園創立法』を完成させた翌年に亡くなるので、そこに表されているのは彼が獲得した最終的な幼稚園像といつてよいであろう。

なかでも私が最も注目するのは、彼が、現に自らが園長としてその責任を持っている幼稚園とは違う、全く新しい幼稚園を提案していることである。たとえば、彼が提案した幼稚園は附属幼稚園の三分の一の規模であった。あるいは、これまでにない机や椅子を導入した……。彼はどうしてこのような提案をしたのであろうか。今回はさまざまな興味深いことがらの中から「園長」についての記述を取り上げて、彼の幼稚園観を探ってみることにしたい。

「設立方法」の最後の「職員ノ責任」の項に、幼稚園に必要な職員の種別と人数、職務内容、給与等が書かれている。それによれば園長は月給五十円以上百円以下、保母は十円以上二十円以下、見習が五円以上十円以下となっている。保母の数は、原本では保母一、保母見習二、活字版では保母一、保母助手四であるから、園長ひとりの給与は保母、保母見習全員の給与の合計を大きく上回っている。

園長について、彼は次のように述べている。

「園長ハ専ラ保育方法ノ適否ヲ監督シ博ク園務ヲ総理スルヲ其任トスヘキヲ以テ眞実ニ幼稚園ノ性質ニ通曉セシ者ヲ要ス然リ而シテ現今本邦ニ在テ幼稚園ノ設立尚ホ創始ニ属スルヲ以テ経験ノ功蹟甚ダ微ナリ故ニ其法制ノ如キ未タ完成ノ域ニ達セサルニ似タリ是ヲ以テ方今創設ノ各園ニ於テ園長ノ地位ヲ占メル者ハ須ラク日ニ月ニ改良ノ点ニ意ヲ尽シ眼ヲ注スヘキナリ殊ニ本邦ニ於テハ未タ幼稚園ニ關涉スル邦言ノ書籍ニ乏キヲ以テ瑣々タル園事ヲ質セント欲スルモ必ス洋書ノ説明ヲ仰カサルヲ得ス是レ此任ニ当ル者ハ最モ適當ノ人材ナルヘキハ勿論加施^ム多少洋学力アル者ヲ要スル所以ナリ。月給金五十円以上金百円以下トナス」(傍線筆者)。

関によれば、園長の務めは「専ラ保育方法ノ適否ヲ監督シ」、「博ク園務ヲ総理スル」ことである。そのためには「眞実ニ幼稚園ノ性質ニ通曉」していなければならない。しかるにわが国では幼稚園は創始されたばかりで経験から得られるものはなさに等しい、と現状

を述べる。その通りであろう。けれども私はその次に意外な文を見出し出して驚いてしまった。傍線を付した文である。

気づかれた方もあるかもしれないが、これは『幼稚園記』の、「フレibel氏ノ所謂法制ノ卓越ナルモ未ダ此ノ如キ高度ニ達セス」という彼自身の文章を下敷きにしてゐる。『幼稚園記』について述べた時にふれたように、これは誤訳であつた。幼稚園の規模が今後大きくなるであろうという文章に続く文で、原文は、

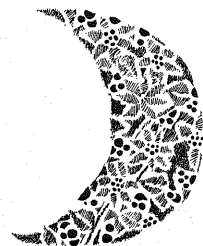
“Froebel's excellent system has, thus far, not been tried on so large a scale.”となつてゐる。「フレイベルの優れた方式は今までそのように大きな規模で試みられたことはなかつた」という意味であるが、幼稚園の規模に関する記述の真意を取り損なつたために、こゝもそれに引きづられて前記のような訳になつてしまつた個所である。

そのとき述べたように、私は（中村正直も含め）ドゥアイの文章の誤訳が最初の幼稚園の大きさを決定

したと考へたが、影響はそれだけに止まらなかつたのである。規模の読み違への結果、次の文章をも誤訳してしまつたことによつて、

関信三の中に、ごく早い段階で彼の幼稚園観の輪郭が固定されてしまつた。すなわち、「フレイベルの幼稚園は未だ完成されてゐない」。彼はその理解の根拠が自分の誤訳にあることに気づいておらず、ドゥアイがそう言つてゐると信じて疑わない。幼稚園が開園される以前になされた誤訳がそのまま生き続け、それが彼の幼稚園観の土台を形成してきたということに、私は彼の園長論を読んで初めて気づき、愕然としたのである。日本の幼稚園は幾重もの誤解の上に形造られていたことになる。

彼の園長論の続きに戻ろう。わが国では幼稚園が造られたばかりで経験が足りないが、それはフレイベル



の法制がまだ完成の域に達していないことに似ている。だから（世界中の）園長は、「須ラク日二月ニ改良ノ点ニ意ヲ尽シ眼ヲ注スヘキ」である、という。私（世界中の）、と言葉を補ったのは、次に「殊ニ本邦ニ於テハ」と日本の特殊性に言及されていることから、このことを述べた時、彼の中には「世界の中の日本」という視点があつたことを確認したいたためである。幼稚園はその基礎がまだ完成されたものではない。そのため世界中の園長が、その改良に取り組まねばならないし、わが国の園長も皆それに参与するのだ。未完成品であるから、方法の探求もしなければならぬ。しかしわが国においては、まだ日本語で書かれた幼稚園に関する書物が乏しい。「瑣々タル園事ヲ質セント欲スルモ必ス洋書ノ説明ヲ仰カサルヲ得ス」であるから、園長たるものは「多少洋学力アル者ヲ要ス」のである。

関の考えでは、園長に「洋学力」が必要なのは、外国の完成された教育施設を模倣するためではなかつ

た。外国文献を紹介すればそれで仕事が終わるものでもない。園長には、外国で生まれ、外国で行われている未完の施設を、わが国で完成したものへと造り上げていく任務がある。世界の中に生きる日本の視点である。そのため的手段として、園長は「多少洋学力アル者ヲ要ス」のである。

関信三がそのような使命を持つ園長を、一握りの園に限定しないで、これから設立をめざすすべての幼稚園にも求めたのは、彼の幼稚園に賭ける期待の大きさを表わすとともに、幼稚園は未完成なものであるという彼の認識によるものであつた。完成されたものであるなら、たとえば関のような代表者が翻訳・紹介すれば十分であろう。しかし幼稚園の法制そのものが未完成であるがゆえに、個々の幼稚園の園長自らが、日々洋書籍を通して研鑽しなければならないのである。

彼が描く園長像は、関信三自身である。彼は自ら書いた通りのことを行ってきた。「未完成」施設たる幼

稚園の園長として、安然としてはいられなかつたのである。未成品であるなら、生涯を賭けてその改良に取り組もうではないか。だから「園長ハ専ラ保育方法ノ適否ヲ監督シ」、「須ラク日二月ニ改良ノ点ニ意ヲ尽シ眼ヲ注スヘキナリ」、ということになる。彼にとつて、それは決して机上の論ではない。園長の肅然たる任務にはかならなかつたのである。

こう考えることによつて初めて、彼の行動の多くを理解することができる。現行の三分の一の規模の幼稚園を主張したり、机や椅子を入れ替えるという思いきつたことも、「未完成の法制」を「日二月ニ改良ノ点ニ意ヲ尽シ」た結果としてなら、より理解しやすい出来事である。外国文献を渉猟し、翻訳と著述が入り交じる彼の執筆姿勢も、ここに原点がある。彼は、園長にはその給与に見合うなすべき仕事があると考へていた。決して名譽職としての園長ではなかつた。彼のこの考へには、幕末維新の動乱期に外国の脅威におびやかされ、今は国を開いて世界の中に生きる場所を見

出そうと歩みだした、日本そのものの姿が見えるように思う。

関信三のこの園長像は、日本の幼稚園の草創期にふさわしいものであつたが、しかし、のちにまで尾を引く重要な問題を含んでいたように思う。最も重要だと思われるのは、彼が、時代性のゆえに、誤解のゆえに、また自らの生涯が重なるがゆえに、園長の役割を重視したことによつて、結果的に園長の地位が固定化され、その一方で保母の働きが軽視される傾向を生み出したのではないか、ということである。「日二月ニ改良ノ点ニ意ヲ尽」すとは、保育においてはむしろ保母にこそ求められる職務であろう。植物の園丁が植物をよく観察してふさわしい方法に改良するように、保母は「子ども

の園」に育つ子どもを日々よく知ることによつて、その成長にかなうように保育の方法を改良しなければな



らない。関信三の幼稚園は、惜しむらくは、この視点が弱かったのではないだろうか。「園長」は『幼稚園創立法』において関信三が初めて使った語であるが、以後の日本の幼稚園には必ず園長がいることになる。

日本では園長はなくてはならないものになった。しかし、背後にあった時代の意志ともいうべきものが失われると、「園務ヲ総理スル」ことだけが園長の職務になつてしまうのであろう。

しかしこのような園長像は、とりもなおさず、関信三が幼稚園というものを、彼自身の理解に従つて、正面から自分の身に引き受けようとした結果であつた。

関信三は彼の幼稚園理解の集大成である「幼稚園創立法」において、「日二月ニ改良ノ点ニ意ヲ尽」した彼にとつての理想の幼稚園を描き切つた。そしてさらに、自らが初代となつた園長という職の、世界に寄与すべき重責を明らかにし、その書を三条実美に献じることによつて、幼稚園そのものを自らの生涯の集大成としたのである。

今回は、彼の最後の書となつた『幼稚園法二十遊嬉』について書いてみたい。

註 「幼稚園創立法」の原本には、本体とは別に、「幼稚園

屋宇仕様書」と題する和綴じ冊子が添付されていた。実際に園舎を建てるために建築の専門家によつて書かれたもの

のようで、同じく手書きであるが、『幼稚園創立法』が併書で書かれているのに対し、こちらは行書で、用いられている和紙も薄手で、罫線が引かれた一般的なものである。

園舎建築の方法と仕様の詳細が書かれており、当時の幼稚園舎の実際に関心のある研究者、あるいは明治初年の洋風建築についての研究者にとつて、益するところが多いのではないかと思われる。

比企の畑から

畑の経済学

小宮山 洋夫

畑が広くなったこともあって、昨年から作物を育てる場所（ウネ）と歩く通路を、固定することにした。

ウネの幅は約一メートル二十センチ、大きく身体を広げるナス、ブロッコリー、サトイモなどは、一本のウネに二列、トマト、キャベツ、ネギ、ジャガイモ、ダイコン、サヤエンドウなどは二列、サツマイモは一、二列に植えつける。蔓を

地に這わせるカボチャ、キュウリは、ウネを二、三本使う。

ウネには、野菜くず、刈り草、落ち葉などを心掛けて施す。通路しか歩かないことと相まって、ウネは、年中やわらかい。それで、畑はあらためて耕さなくともすむようになった。ウネの土をクワを使い、右へ左へ動かすだけで、大半の作業は完結する。

結果的に、耕作の時間をかなり節約することになった。もちろん畑では、耕作そのものも楽しみの一つなのだが、過剰になると、快が後退して苦痛がはじまる。浮いた時間は、畦道に腰をおろし、畑や林、山並み、空などを眺め、あれこれと夢想して費やす。

ウネと通路の固定は、「最小労力の最大効果」という経済原則を、実現するものだった。無意識のうちに。

野菜づくりは、手をかければかけるほど、よい成果が得られるという思い込みがある。しかし、そんなことはない。もともと植物は自分自身で育つ力を持っている。

至福な「自然」に感謝しよう。彼女は、必要な

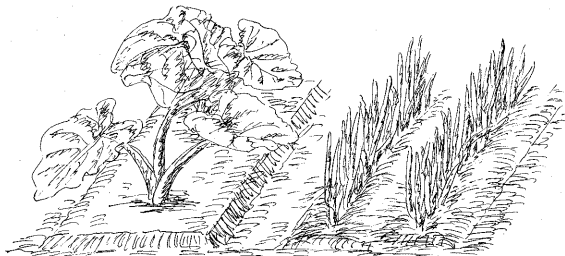
ものを容易に獲得しうるものとし、獲得しにくいものを不必要なものとしたがゆえに。

(エピクロス『教説と断片』岩波文庫)

適切な世話さえ欠かさなければ、労力を省く経済原則の適用は、収穫物の有用性を何らマイナスするものではない。

秋はなんといつて

も、サツマイモ掘りが楽しい。一昨年、夏とくに高温だったこともあって、イモの虫食いがはげしかった。ただし、虫食いは表皮にとどまっているから、食べる上に、気になる



サトイモとネギ

ほどの被害ではない。

日氏は嘆息していった。

「こんなきかない虫食いのイモは、恥ずかしくて人にあげられない」

ぼくは応えた。

「いいではないですか。美味しければ」

ぼくはむしろ店頭に並べられたサツマイモの表皮の美しさに、疑念を抱きはじめていた。

日氏は昨年、虫害を防ごうと、イモを植えつけるウネに、消石灰を大量に施した。ある園芸店からすすめられたからだ。その結果は、散々だった。ツルは伸びない、少量しか採れない。イモは変質してまったく食べ物にならなかった。

食べ物である野菜の有用性(使用価値)は、健康によいということにつきる。しかし、他の商品

とちがって、眺めても、触っても、さらに味わっても分らない。その意味では野菜は(農産物一般に通じるのだが)、特

異な生産物といえよう。

そこで市場においては、

買い手は暗黙のうちに、大きさ、外観で判断、よしとして求めることになる。

商品野菜のつくり手は、これに呼応するように、化学肥料、ビニール、農薬の利用など、外観を第一目的とする生産方法を押し進めていく。自分で消費する対象でないから、商品なのだ。商品は自分のための有用物でなく、他人のための使用価値なのである。

商品生産においては、商品の貨幣への転化は、まさに「命がけの跳躍」なのだ。売れなければ、



ハクサイ

生産を続けられなくなる。また、売れたとしても、望んでいる価格を実現できるとは限らない。外観で買われるとすれば、中身はどうしても後退していく。

自給を目的とする家庭菜園では、小さくとも、形が悪くとも、自分なりのものが育てばよいはずだ。問題は有用性だから。そして、それにふさわしい育て方が、自然に決まってくる。

にもかかわらず、どこかで比較している。何と？ 農家の畑や店頭野菜、つまり商品としての野菜と。そして漠然とした目標になってしまっている。人にとりっぱと認められ、ほめられ



キャベツ

たい気持ちもないではない。そこから、自家消費のための栽培であるにもかかわらず、商品生産の方法に、誘惑を覚えることが時折ある。そして肝の座っていない自分を腹立たしく思う。「貨幣に転化される野菜」に幻惑されるとは。

メヒシバ、オヒシバ、エノコログサ、アカザなど、猛々しい夏の雑草が姿を消す秋は、おだやかな心地で、畑仕事ができるのがうれしい。トマト、ピーマン、トウモロコシなど、背の高い夏野菜から、ダイヤモンド、ニンジン、キャベツ、ブロッコリー、ハクサイ、コマツナなど根物、葉物野菜に入れ替わると、畑は落ちついた風景に移っていく。

(家庭菜園研究家)

編集後記

娘の小学校では、六年生の秋の一日、「ふれあい広場」が行われました。この行事は、学校・地域・家庭のふれあいの場として、PTAの主催で三年前に始まりました。

私たちのクラスは、「喫茶店」をすることに、クラス委員の私たちは、早速、クッキーと飲み物を売る準備に取りかかりました。

「喫茶店」は、日頃子どもたちに縁の薄いお店です。最初に私たちが心を砕いたのは、準備の段階で「子どもたちとどうやってふれあうか」ということでした。結局、私たちが新米委員で、お世辞にもスマートとはいえない、試行錯誤の準備だった

ことが幸いしました。途中で、みんなから出た、新しいアイデアが加えられました。

クッキーの試食をする頃には、チケットにはピンゴ券もつけてピンゴ大会もしよう、景品もつけよう、ということになりました。さらに、授業時間に食い込んで、有志による、ポスターや看板、呼び込みのプラカード作りなどの準備も進みました。その中で、「自分たちのお店」に最上級生としての誇りがもてるようになっていくのがわかりました。

当日は、プラカードをもった子どもたちが精力的に宣伝に繰り出した喫茶コーナーでは、部屋の前に順番を待つ人が並んでいる程の盛況でした（学校便りより）。

娘がその夜ほつりと言いました。「喫茶店もよかったね」と。(A)

幼児の教育

第一〇〇巻 第十号

(二〇〇一年十月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十三年十月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8601 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8601 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三-五三九五-一六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-一六六〇四(編集)

振替 〇〇-一九〇-11-19640

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

カリキュラム作成のサポート役にリニューアルして登場

改訂新版 幼稚園 わかりやすい指導計画作成のすべて

平成10年に改訂された幼稚園教育要領ならびに平成12年に改訂された幼稚園幼児指導要録の改訂主旨に基づき、必要箇所をわかりやすく書き改めました。

カリキュラム作成に頭を悩ましている保育者の皆さんのサポート役として是非お役立てください。

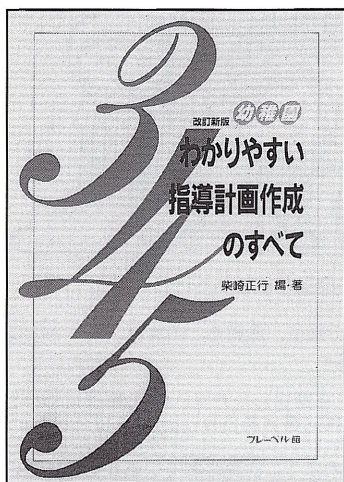
●主な改訂箇所

第1章 幼児理解から指導計画へ

1. 幼稚園生活において幼児の発達はどのように成し遂げられていくか
2. 指導計画作成するには、幼児の何をどのように理解すればよいか
3. 指導計画作成するための基本概念を整理しておこう
4. 幼児理解から指導計画の作成へとどのように進めていけばよいか
5. 短期の計画から長期の計画へ（各計画の関連性）

第5章 幼児指導要録の解説と記入例

1. 幼児指導要録の考え方
2. 幼児指導要録の記入の仕方
3. 幼児指導要録の記入例



最新刊

柴崎正行 編・著（東京家政大学教授）

B5判304頁＋折2丁 定価：本体2,600円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

一人ひとりの子どもを生かしながら、クラスもスムーズに運営したいという保育者の切実な願いに応えるための参考書です。

「個と集団が育ち合う園生活シリーズ」(全5巻)

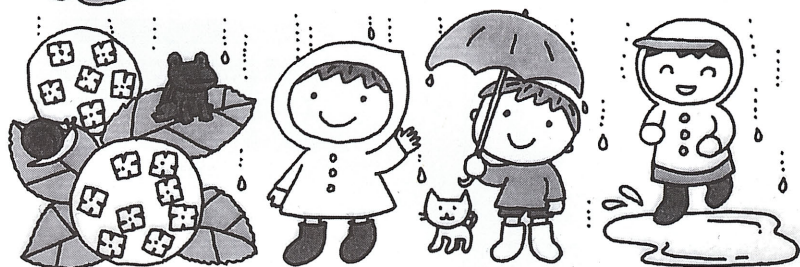
最新刊!



くまさんこ……

- 第1巻 『0・1歳児クラス運営のすべて』
- 第2巻 『2歳児クラス運営のすべて』
- 第3巻 『3歳児クラス運営のすべて』
- 第4巻 『4歳児クラス運営のすべて』
- 第5巻 『5歳児クラス運営のすべて』

編著者 柴崎正行 (東京家政大学教授)
川合貞子 (東京家政大学助教授)
大豆生田啓友 (関東学院女子短期大学講師)



次の5つの柱で、毎月のクラスの生活をわかりやすく書き表しています。

- ①生活する姿から
その月にあった様々な出来事を、生活行動、遊びの様子、保育者との関係、友だち関係、保護者との関係などを、エピソードを通して描いた。
- ②生活の見通しと保育者の願い
エピソードからその月の生活や遊びの方向性をどう見通したかを、①の事例について「競み取り」「願い」「援助」といった形で具体的に書きあらわした。
- ③指導計画の作成と見直し
その月の指導計画を示し、その中に②の願いがどのように計画されているかを具体的にわかりやすく表した。
- ④保育のアイデア
その月の環境構成や保護者との連携などの中で、こんな工夫をするよと思われるアイデアを具体的に示した。
- ⑤編者のコメント
以上の実践事例に対して、編者がどう読み取ったか、そのポイントについてコメントした。

B5判 各224~248ページ 予価：本体各2,000円+税

キダーブックの
フレール館